Routes

ルーツ » 経営者たちの軌跡を辿る

The story of the entrepreneurs' businesses and lives

2025.10
VOL.342

■巻頭特集

令和の中高年転職事情
「人手不足なのに仕事がない」の裏側

■表紙写真　がんのリスク検査「N-NOSE」発表会。ポスト投函で献体提出が可能に

WIN・TEC 株式会社
兵庫県神戸市東灘区本山北町 4-14-30
URL：https://www.wintec.biz

次の世代のために　“本物の野菜”を作れる農業を目指す

近年化学肥料や化学農薬によって地力は衰え、野菜の栄養価も半減しているという。そうした状況を打開すべく、古来の有機農業と現代技術を組み合わせた農法の研究開発、またその生産、普及に取り組んでいる濵本社長。子どもたちに心から安心して食べられるものを届けたいとの思いで、国と連携しながら励んでいる。本日はタレントの野村将希氏が社長のもとを訪問し、事業について詳しいお話を伺った。

WIN・TEC 株式会社
代表取締役
濵本 洋一　特別 × 対談　**野村 将希**　ゲスト インタビュアー

——御社は農業における温暖化対策や土壌改良の技術で注目を集めているとお聞きしました。どういった技術なのでしょうか。

専門的な言葉になりますが、鉄腐食肥料化剤（SK鉄触媒）とバイオマス炭施用によるCO²ゼロエミ農業（農業に於ける温室効果ガスの排出量を実質ゼロにする）を目指しているんです。当社では新しい肥料の研究と有機農業の普及に努めており、その栽培指導も行っています。また自社で契約栽培もしていまして、より栄養価の高い野菜を生産し、できた野菜は関西や関東の高品質スーパーマーケットなどに卸しているんですよ。

——「鉄触媒」と「炭」を使った農業なんですね。私は今70代ですが、昔は生活の中でもよく炭を使っていた記憶があります。

炭は昔から各地域で経験的に使われていました。土壌改良だけでなく、家畜の飼料に混ぜて下痢を防ぐ目的で今でも使われております。土壌も腸内も微生物がたくさん住んでおり、炭にはその環境を改善する効果があるんです。よく善玉菌、悪玉菌とか言いますよね。その善玉菌は炭を住処として増殖するので、善玉菌が増えて環境のバランスが良くなるという仕組みなんです。

——濵本社長はどういった経緯で炭に着目するようになったのですか。

実は私は前職で『大幸薬品』のグループ会社『大幸TEC』の社長をしていたんですよ。あの有名な「正露丸」の主原料は炭焼きで出る木タール中に含まれており、それを蒸留精製し主原料を抽出します。その主原料を作っているのが『大幸TEC』。製造過程であの独特な匂いが出るので工場は都会では作れず、同社は山形の山のふもとで生産しているんですね。私も頻繁に出張していました。そんな折、会社として地元の人と交流会を行っていましたら、木酢液の話が出たんです。農業をやっている方は、わざわざ木酢液を買って使っているとのこと。『大幸TEC』では薬の原料となるもの以外は産業廃棄物として捨てていましたので、木酢液がそんな使い方ができるとは驚きでした。そこから会社で農業での炭と木酢液活用の研究が始まったんです。

——捨てるものが活用できるのですから、やらない手はありませんよね。

その研究は実践的なところまで進みました。「ラッパ木酢炭素」が商品化され、やがて「木酢米」というブランド米が二十数年前に誕生。しかし、米価の下落などの要因で採算性の問題から環境に配慮した事業は5年間で終了に。でも近年になって環境問題が叫ばれるようになり、時代が追いついてきました。国でも炭を使った農法を広めるプロジェクトが立ち上がり、今私もその一員として加わっております。

——では、もう一つの「鉄触媒」のほうはどういった経緯で？

「鉄触媒技術」は、取引先の社長から紹介され興味を持ち取り組みを始めましたが、数年前にある欠点を発見したことから、旧知の会社に協力いただき、当社独自の微生物配合鉄触媒「SK鉄触媒」を完成させました。SK鉄触媒は、家畜糞尿に混ぜると3日程度で悪臭がなくなり、1週間で施肥可能となります。速攻で堆肥化が進むことから一般的な堆肥よりも肥料成分豊富となり、作物の生育スピードも速く、収穫増が期待できます。また、堆肥化が早いので省スペースで繰り返し堆肥の製造ができたりとメリットが多い。そこで私は自分が行ってきた炭の活用と、この「SK鉄触媒」を組み合わせて、環境保全型農業技術の普及を進めていこうとしているわけです。

▲ 対談内で紹介された SK 鉄触媒

——お聞きしたいのですが、今までの化学肥料や化学農薬は何が良くないのですか。

化学肥料や化学農薬は1950年代ごろから広く使われるようになり、それにより穀物の収穫量が劇的に上がり、世界の人口増に貢献しました。ところが次第に土壌環境の悪化や水質汚染が起こり、土地が疲弊して農作物がうまく育たないところが出てきたんです。そこで人類は化学肥料、化学農薬を使い続けることは良くないと気付いたんです。ただ、それ以前の農業のやり方に戻すと、増えた人口を支えきれない。そこで今、次世代型の有機農業の技術開発が急がれているのですよ。国はそれを2040年までに確立するという目標を掲げており、私もそれに関わっております。

——なるほど。私が子どものころを思い出しても、野菜の味が今とは違っていたような気がするんですよね。

栄養価が低下しているんです。今と昔では、ビタミンやミネラルが半分ぐらいというデータもあります。昔は堆肥で土壌の活力を増進させる農業だったのに、化学肥料や農薬を多用した結果、地力が低下して、それが野菜の味と栄養価にも現れている。こんなことではいけませんよね。私には幼い孫たちがいるんですが、子どもほど身体形成に食べ物の影響を受けるということを思うと、もっとちゃんとした野菜を食べさせてあげたいと切に思います。

——国の仕事にも携わりながら、お忙しいでしょうに。熱意が伝わってきます。

4年前から「みどりの食料システム戦略」という取り組みも始まっています。これは温室効果ガスの削減、化学農薬の使用量の50％低減、化学肥料の使用量30％低減などを目指すというもの。当社においても温室効果ガス削減の分野で経産省の基金を得た研究事業に協力しているところです。

——将来のため、お子さんやお孫さんの世代のために頑張っていただきたいです。

世のため人のために頑張りたいと思います。「SK鉄触媒」とバイオマス炭施用農法を定着させて、これを温暖化対策として打ち出すことで、次の世代に良い環境を渡していきたいと思います。

Column

炭について語り始めると話が尽きない濵本社長。対談ではその材質、製法にまで話は及んだ。興味深かったのは、炭の質は炭窯の構造と温度によって決まるということ。炭の上級品として知られる備長炭は、しっかりとした炭窯で高温で焼くのだという。最後にパット窯を開けて酸素を入れることで、最終的には1,000度以上の高温で焼きあげるのだとか。すると不純物が無くなって炭素率が８～９割の硬い炭となる。炭は作り方により様々なので、農業用に最適なのはどんな炭か、目下試行錯誤しているところである。ちなみに木酢液を使った浴用化粧品は日本で唯一、社長だけが開発しているというから驚きだ。

常に、何か新しいことを考えている社長。人から面白いことを紹介されると、すぐにやってみたくなるそうだ。「これは性分ですよね」と笑う、その瞳に純粋な探求心が窺える。こういった人によって世の中の新しい扉が開いていくのだろう。地球を守る役割を担っているのであろう社長の活躍に、今後も期待したい。

After the Interview

「現在はここで紹介した事業を一人で動かし、国との仕事も並行して担っているという濵本社長。『年間 362 日は働いていますよ』と苦笑されていましたが、まだまだやりたいことがたくさんあるといった感じで、その瞳はエネルギーに満ちていました。社長が打ち出す取り組みによって、より安心できる農業が広がっていくことを期待しています」

野村 将希：談

© 2025 USP-Management Co., Ltd.